

## 宮本久雄先生ご退官に寄せて

袴田 玲

宮本久雄先生が東京大学をご退官後、四月から上智大学で教鞭を取られるらしいとの情報を得た同期の高橋君と私は、逸る心を抑えきれずさっそく上智大学のホームページでその詳細を調べました。それはちょうど宮本先生が長年教鞭をとっておられた駒場の図書館でのことで、いまだに私はあの初春の日の興奮をひきずっているようなところがあります。

当時、私は大学院の修士課程に入って一年が過ぎようというところ、グレゴリオス・パラマスや東方キリスト教についての勉強をはじめたばかりでした。現代フランス哲学を勉強するつもりで修士課程に進んだのに、鶴岡賀雄先生が授業中にボソツとつぶやかれたアトス山のヘシユカストに興味を持ってしまったが大変なことになったと思いは始めていました。なにせギリシア語はもちろんのこと、

キリスト教のもっとも基本的なことすら分かっていなかったの、なにもかもが勉強だったのです。しかも、この世界に足を踏み入れる決意を固めた（というほど当初は大ごとだとは思っていませんでしたが）のが夏も過ぎてからだったので、ギリシア語初級の授業にもいままさら入れず、「出遅れてしまった、出遅れてしまった」と焦りをつのらせていたのです。私の焦りに拍車をかけたのが、宮本先生がもう東京大学を退官されてしまうという事実でした。駒場での教養課程時代に宮本先生の授業を受けるチャンスはいくらでもあったのに、本郷の宗教学宗教学史学研究室に進学してからだつて先生のゼミに通おうと思えば通えたのに、哀しいかなその頃の自分は幼くて、恵まれた環境にいることに気づくことさえできなかった、嗚呼どうしてあと数年早くこの世界の魅力に気づかなかつたのか、どうしてもっと勉強しておかなかつたのかと自分を呪うような気持ちでしたのです。宮本先生が再び教壇に立たれるというニュースはそんな私にとってまさに福音でした。

初めて目にする教壇の宮本先生は、先生の文章を読んで私が勝手に想像していたよりもずっと柔らかな物腰で、教室の若者へ慈しみに満ちたまなざしを向けながら、哲学と

キリスト教の壮大な歴史をユーモアたっぷりに物語る、ゆでた玉子のように美しいお顔の先生でした。廊下で大緊張しながら自己紹介しようとする私を（行動を共にしていた同期の高橋君は、先生がまだ駒場にいらしたときに先生の研究室を訪ねたことがあり、私より幾分か余裕の表情）、とくにいろいろと質問されることもなく、ニコニコと少しいたずらっぽく笑って受け入れてくださいました。先生のこの包容力に満ちた大らかさがどれほどありがたかったか、そして今に至るまでどれほどその恩恵に浴しているか、具体的に書き出していると私一人でこの記念号の紙面を埋めてしまふほどなのでやめますが、ふだん改まって申し上げる機会のない感謝の気持ちを、この場をお借りしてお伝えしたいと思います。

それから今日までの七年間半、授業で、読書会で、合宿で、さらにフランス、チェコ、オーストリア、ロシアなど海外での研究旅行や学会で、多くの時を共に過ごさせていただき、たくさんのお教えをいただきました。ギリシア語原典と一緒に読んでいただくときなど、自分としては辞書や文法書を一生懸命調べ万全な訳を用意して臨んだはずが、その場でひよいひよいと目を通された先生が

まったく別な読み方を提示され、こちらはもう内心ドキドキしながら「いや、でも文法的には先生の仰るようには読めないのでは……」なんてモゴモゴ言って抵抗を試みるものの、先生の読解の方がずっと深く面白いので太刀打ちできず、挙句の果てに、後になって先生の提示された通りの訳になるような異読が見つかったり（先生はその異読の存在をご存知ではないはずなのに！）、というようなことが一度や二度ではありませんでした。そんなとき先生は「ヤマカン、チョツカン、レイカン」なんて仰って、やつぱりいたずらっぽく笑うのです。（もちろん、ヤマ勘であれ直観であれ靈感であれ、それが先生の長年におよぶ精確なギリシア語、ラテン語、ヘブライ語原典読解とそれに基づく深い理解に裏打ちされたものであるの言うまでもありません。）あるいはまた、授業中に「これはどういうことだったかな、袴田さん」とせっかくな先生が話を振ってくださいったのに、私はといえは（打てど響かず）、弱々しく「え〜」とつぶやいて視線を虚空にさまよわせるばかり——そんなときでも先生は、ガツクリ肩を落とされつつも、あくまで優しく丁寧に問題を解説してくださるのです。

教えをいただいたのは教室でだけではありません。いや

むしろ、先生の前でランペの教父ギリシア語辞典を開いた回数よりも、先生と共に空けたワインの本数の方が多い、なんていう学生もたくさんいるのではないでしょうか。一日の勉強を終え、一同ホツとして囲む食卓は温もりに満ち、多かれ少なかれ悩みを抱える学生たちが少しばかり羽目をはずしたりそれを赦したりしあっている。宮本先生はそんな皆の様子を優しく見やっっているかと思えば、突如としてワイングラスを前に身振り手振りを加えた哲学論議を始められ、教室では無口だった学生が果敢に質問をなげかけ、先生がそれに答える。宮本門下生にとつて日常的なそんな光景は、緩やかだけど確かにつながつた家族の姿を見るようでもあります。ふと、先生がさきほどからたびたび注文の品を運んでくる店員さんに話しかけます。「このお魚、美味しいねえ。どこで獲れたんですか。へえ、福井で。それで、あなた、お国はどちらなの。え、お国っていうのは出身地のことですよ。熊本、ああそう。熊本はいいよねえ、雄大な阿蘇山があつて、温泉もじゃんじゃん湧くし、ご飯も美味しくて。」突然話しかけられた店員さんは、にわかには皆の注目を浴びて戸惑いつつも、頬を赤らめて応答します。下手するとただの迷惑な酔っ払い客ですが、宮本先

生に話しかけられた店員さんはい、ちょっと嬉しうに仕事に戻って行きます。宮本先生のなんでもない語りかけによつて、先刻までマニュアル通りの言葉しか発さなかったチェーン居酒屋の一アルバイトは、熊本から東京に出て頑張つて働いている気立ての良いお嬢さんとなつて私たちの前に出現するのです。こんなとき私は、宮本先生がまた魔法をかけたな、と思つて嬉しくなります。

宮本先生の大きな魅力の一つは——そしてそれは人びとから敬愛される偉大な人物に共通の資質であるようにも思われますが——、大胆さと繊細さが同居されている点ではないでしょうか。東方キリスト教学会や共生学研究会を創設され、中世哲学会や教父研究会といった歴史ある学会組織の長を務められるなかで、狭い枠にとられず、旧弊を打破し、次々に新たな企画を立てられては実行するリーダーシップと、出来の悪い学生一人一人に心を留め、共に悲しみ共に喜んでくださる細やかさが、宮本久雄先生という人格において矛盾なく共存しているのです。そしてさらにその奥に時折垣間見えるのは、おそらく、或る静謐なる孤独なのではないかと思えます。それが単独者たる修道士が必然的に纏う孤独なのか、もっと違う種類のものなの

かはよく分からないのですが、私はそこにイエスの孤独を見る思いがします。先生はお話のなかでしばしばイエスの孤独に触れます。当時イエスを迫害した者たちはもちろんのこと、イエスの十二人の弟子たちでさえ、師の本當の思いを理解することはできなかったのだと。しかし、孤独のうちに絶望することなく、断絶を乗り越えて人々とかかわり、自己とともに他者をも変容させながら新しい世界を拓いてゆく——これはまさに福音書に描かれるイエスの生き様そのものであり、宮本先生の実践される脱在エビイェロギアの哲学、自他相生の哲学であるように私には思われます。

絶望を希望に置き換え、断絶を突破させる力に貫かれて、先生の哲学は絶えず伸展エクステンションしてゆきます。常に新たな物語りを発掘し、新たな言葉を創りつつ先生は思考されます。何かを企画するときでも、次々と着想を得られた先生の驚異的な行動力によって、気がつけば当初の予定よりずっと壮大なプロジェクトになっていた、なんていうことが多々あるものですから、事務のお手伝いをするだけでも大変です。宮本先生には、企画にせよ哲学にせよ人間にせよ、こんな風に一瞬のきらめきを逃さずに猛烈な勢いで磨き上げてゆくところがあります。そんなときの先生は童卷のよう

なもので、もう圧倒的なエネルギーで周囲を巻き込みつつ、どこに進んで行くのか誰にも見当がつかないのです。この童卷に巻き込まれてしまったら、振り落とされないようにしがみつくらうしかできることはありません。すると、あるとき急に風が止んで、見たこともない場所に連れてこられていくのです。

先日、早々に荷物の整理を始められた先生の研究室の本棚が半分以上空いてしまったのを見て、私は反射的に七年半前の焦りを思い出しました、「また先生がどこかに行ってしまう！」。宮本先生はいつだって私たちのずっと先を歩き、ときどき振り返っては私たちが追い付くのを待って、ほんのしばし私たちと共に戯れ、また先に行かれてしまうのです。次に先生がどんな霊感インスピレーションを受けて、どんな物語りを語りだしてくださるのか、怖さ半分楽しみ半分で私は今からゾクゾクしています。